

イギリスの現代美術にみる表象の差異―

「イギリス美術」と「文化的多様性」に関わる文化政策のあいだで

石松紀子（九州大学大学院比較社会文化研究院）

1990 年代前半、インド亜大陸出身でイギリスを拠点に活動する 2 人のアーティストたちの作品が、福岡市美術館でそれぞれ異なる文脈をもつ展覧会で展示された。1 人はアニッシュ・カプーアで、1990 年から 1991 年にかけて日本国内の美術館 6 カ所を巡回した『イギリス美術は、いま：内なる詩学』展に、イギリスを代表するアーティストとして参加した。もう 1 人はラシード・アリーンで、1993 年に開催された『ラシード・アリーン：抗争／構造』展で、アジア現代作家として紹介された。アニッシュ・カプーアはインド出身で、ラシード・アリーンはパキスタン出身であるが、どちらもインド亜大陸からイギリスへと渡り、そこを拠点に活動が続けている。福岡市美術館の展覧会では、1 人は「イギリス美術」として、他方は「アジア美術」として紹介されており、明らかにその表象のされ方に違いがある。このような表象の差異は、イギリスでの「イギリス美術」に関する展覧会と「文化的多様性」に関わる文化政策といった二つの異なる姿勢が、ダブルスタンダードとなって福岡市美術館の展覧会に反映されたと考えられる。本発表では、アニッシュ・カプーアとラシード・アリーの活動や作品に関連づけながら、イギリスにおいて展覧会や文化政策をとおして形成される「イギリス美術」と「文化的多様性」の美術が、いかに表象の差異をつくりだしているのかについて考察することを目的とする。

まず、「イギリス美術」や「文化的多様性」に関わる美術が、どのように形成されてきたかについて検証する。79 年に英国アーツ・カウンシル主導で始まった“The British Art Show”展は、「イギリス美術」を 5 年ごとで紹介する展覧会で、同時期に始まったターナー賞と共に、主流的な「イギリス美術」を形成してきた。一方、89 年に「文化的多様性」に関わる文化政策が施行されるが、その前身は 86 年の「芸術とエスニック・マイノリティ：行動計画」であり、非欧米系アーティストたちの周縁的な待遇を是正するためにとられた政策である。このような 2 つの異なる美術への姿勢があるなか、アニッシュ・カプーアは前者に、ラシード・アリーンは後者と関わりながら活動してきた。この 2 人の作品や活動をとおして、イギリスにおける 2 人の立ち位置の違いを検討する。そして、福岡市美術館での 2 つの異なる展覧会から、イギリス国内におけるアーティストたちの位置づけや評価が、海外での表象受容にも影響を与えていることを検証する。このような考察や検証をとおして、展覧会や文化政策が「イギリス美術」や「アジア美術」といった文化的差異の表象を形成する過程を明らかにしたい。